

『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (15)  
— 『ガーリチ・ヴォルイニ年代記』 の編集史について

中 沢 敦 夫

富山大学人文学部紀要第 75 号抜刷

2021年8月

## 『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈(15) ―『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』の編集史について

中 沢 敦 夫

### 1. はじめに

『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈の連載(10)～(14)(末尾の参考文献参照)で行った、『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』部分の翻訳と注釈作業の締め括りとして、本稿では本年代記の編集史に関する基本的な問題を検討する。それは、編集の動機、編集方針、編集過程、編集者、最終的な成立とその時期などにかかわる問題である。さらに、本年代記元本(оригинал)成立以降になされた、写本流通過程の重要な編集である、イパーチイ写本に反映されている年代挿入の問題についても触れてみたい。

このような編集史の諸問題については、文献学および史料学の分野の先行研究が数多く存在する<sup>1)</sup>。ここではそれらの中で明らかにされてきた主要な論点を参照しながらも、主に翻訳・注釈作業の中で得た知見をもとに、編集過程を再構成する作業を通じて、この問題を概観してみたい。なお、本稿は『キエフ年代記集成』部分の翻訳と注釈の末尾に付した筆者による解説論文<sup>2)</sup>と同様の趣旨のものであり、編集史研究の方法もこれに準じている。

### 2. 『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』の年代記としての特徴

『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』がロシア中世文献における「年代記」(летописание)のジャンルに属する作品であることは改めて言うまでもない。キエフ・ルーシ時代の代表的な年代記集成である『イパーチイ年代記』を構成する『原初年代記』『キエフ年代記』に次ぐ3番目(最後)の部分となしており、年代的にも先行の『キエフ年代記』を引き継いでいることから、本年代記の編集者(たち)もこれを年代記と見ていたことは疑いない。本年代記には「年代記記者の記録の方法についての考察」[820]<sup>3)</sup>という記事があり、「年代誌の記者はすべてを書く必

---

1) 主な研究として、[Генсьорський 1958, 1961][Котляр 2005][Орлов 1926][Пашуто 1950][Ужанков 2009][Черепнин 1940]を参照した。ただし、本稿では先行研究における個別の論点と見解に対する検討・コメントは行わなかった。これについては、本稿を発展させた今後の研究の課題である。

2) [中沢 2018: 241-265 頁] 参照。

3) 本稿で[715]のように角カッコ内に示されている数字は、翻訳の底本としたテキスト刊本の欄(столбцы)番号であり、翻訳と注釈の連載では、訳文中に【715】のように示されている。なお、本稿で年代を参照するときには、イパーチイ写本のテキスト内に記された年代(年紀)は用いず、考証された実際の年代(翻訳では項目表題である【】内に書き入れた)を用いている。

要がある」(Хронографу же нужна есть писати все)と、自らを「年代誌記者」(хронограф)に比定している記述がある。さらに、1289年の記事ではムスチスラフ公[S4]の言葉として「わたしは年代記に書き込んだ」(вопсалъ есмь в лѣтописѣцъ)[932]という文言があり、本年代記が「年代記」(летописец)であることを編集者が認識していることは明らかである。

このように、『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』は基本的に年代記ジャンルの作品ではあるが、キエフ・ルーシ時代に編纂された他の年代記と比べると、これらと異なる特徴もまた持っている。

まず、年代記のタイプ<sup>4)</sup>の視点から本年代記を見てみると、明らかに「集成型」(сводный)の年代記である。その点では先行する『原初年代記』『キエフ年代記』と基本的な性格としては共通しているが、その「集成」の性格はある程度異なっている。先行の二つの年代記は記事の中に相当部分の編年記録(хронологические записи)を取り入れ、それを資料とした編集(集成)を行っているが、本年代記には、諸公の結婚、子供の誕生、公族の死亡、教会の建設や献堂などについての編年記録の記事があまり多くない。さらに、天のしるしや自然災害についての記述も先行の年代記に比べると少ない。その代わりに、遠征、戦争などにかかわる諸公の活動についての様々な長さの物語(повести)が集められ、それが編集(集成)されている。

ただしこれらのことは、先行する諸年代記との比較によって明らかになる特徴であり、集成年代記としての程度の差の範囲である。基本的には、年代の記入がないこと(後述)を除けば、本年代記は従来の集成型の年代記のヴァリエーションと見なしてよいだろう。

### 3. 『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』の編集単位と構成

さて、本年代記の編集過程を解明するために、年代記の編集単位を取り出して、その編集の成立について検討し、そののちに、それらがどのように集成されてより大きな単位の集成本が作られて現在の元本に至ったかについて検討していこう。

本年代記には、共通資料の使用や記事の借用・転用によって生じた並行記事を持つ別の年代記は存在しない(存在する場合にはテキストの対照研究が可能になるが)。そのため、編集過程解明のためには、テキストの文献学・史料学的(語彙、構文、文体の分析や引用典拠の特定、記事内容の思想的・文学的評価など)な分析によって、テキストの層を分離して編集単位を取り出し、変更、追加、後年の挿入などの痕跡を明らかにすることで、何重にも施されている複雑な編集過程を再現するという方法を取ることになる。

---

4) 以下に述べる年代記のタイプについては、[中沢 2018 : 241-243 頁]の考察を参照。

まず、編集史の観点からは、本年代記を大きく「ガーリチ年代記」(Галицкая летопись<sup>5)</sup>)と「ヴォルィニ年代記」(Волинская летопись)に分けることが定説になっている。すなわち、[715] (1205年)～[848] (1258年)の範囲が「ガーリチ年代記」であり、それに続く、[848] (1259年頃)～[937] (1289年)の範囲が「ヴォルィニ年代記」である。本年代記の通名『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』(Галицко-Волинская летопись)は、この二つの部分の合体をわかりやすく言い表したものである。

両者の切れ目にあたる [848] の個所のテキストは、1258年のブラルダイの最初の遠征にかかわるダニールの言葉が途中で中断しており。切れ目がはっきりとしている。そしてなによりも、内容的に見て、前者の「ガーリチ年代記」はガーリチの公座を5度狙ってこれを獲得したダニール公 [I111] の事績を扱っているのに対して、後者の「ヴォルィニ年代記」は、弟のヴァシリコ [I112] およびその息子のウラジミール [I1121]、さらにこれを継承したムスチスラフ [S4] の三代にわたる活動が主に記述されており、その活動拠点もヴラジミール=ヴォルィンスキイとその周辺地になっている<sup>6)</sup>。このように、この個所で記事の「主人公」と「舞台」が截然と分かれていることから、編集者も大きく替わったと考えるのが妥当であろう。

それでは「ガーリチ年代記」と「ヴォルィニ年代記」は、それぞれどのような編集過程を経て成立したのだろうか。以下では、編集の切れ目に注目しながら独立した編集単位を取り出し<sup>7)</sup>、それらの思想・文学的内容と単位相互の関係について考察していきたい<sup>8)</sup>。

## (1) 「ガーリチ年代記」

### ① ロマン公とウラジミール・モノマフ公の事績の物語 ([715]-[717])

「大いなる公ロマンの支配の始まり」の文言で始まり、ロマンへの短い讃詞が述べられ、その後はかれが範としたモノマフ公の事績が、ポロヴェツ人オトロクのエピソードを物語ることによって間接的に語られている。年代記の冒頭としては異質な「文学・フォークロア的」な描写だが、口承文芸的な素材を資料にするところは、『原初年代記』の初期の一連の記事(オレー

---

5) 研究の上で、この年代記は Летописец Даниила Галицкого (「ガーリチのダニール年代記」と呼ばれることが多い。これはチェレブニンの命名 [Черепнин 1940] を踏襲したものだが、本稿では分かり易さの観点から「ガーリチ年代記」と呼ぶ。

6) 「ヴォルィニ年代記」の冒頭の記事は、ヴラジミールで行われたヴァシリコ [I112] の娘の結婚式のついてのもので [848]-[849]、ここにおいて記事の「主人公」の交代が象徴的に表れている。

7) 以下では、編集の独立性が認められる編集単位を丸中数字で示し、表題には下線をほどこした。

8) 主に、もっとも詳しいと思われるコトリヤールのまとめ [Котляр 2005: С. 35 - 52] を参考にしたが、編集と物語の単位やその意味付けについては独自に考察した。

グの死、オリガ妃の復讐、ペチェネグ人からのキエフ防衛)に倣ったのかもしれない<sup>9)</sup>。

この物語は「ロマン公はそれゆえに、〔モノマフ公に〕倣って異族どもを滅ぼそうと力を尽くした」で終わっている。この「異族」(иноплемьники)に対して対抗するというモチーフは、「ガーリチ年代記」のみならず、本年代記全体を貫く主要なイデオロギーであり、最初に置かれたこの象徴的な物語の中でこれが宣言されている。

以上のことからこの物語は、「ガーリチ年代記」が全体として成立した際に、その編集者によって書かれ、構成的な配慮によって冒頭に置かれた可能性が高いのではないか。

### ② 外国勢力や反対派諸公によるガーリチ支配の物語 ([717]-[732] 1205年～1217年)

「大いなる騒乱が起こった。ルーシの地にはかれの息子が二人遺された。一人は4歳で、もう一人は2歳だった」の文言で始まる長い物語で、実質的な年代記としての始まりでもある。ここで使われている「大いなる騒乱」(великий мятеж)の語句は重要で、[750][762]の個所でも、編集者自身の言葉として、年代記が描き出すべき出来事の代表として挙げられている(以下の⑤の項を参照)。それゆえ、この文言は「ガーリチ年代記」が成立した際に書き込まれた可能性が高いだろう。

以下の物語には、主に少年時代のダニールの苦難の活動と、異族(ハンガリー、ポーランド)の手に翻弄されるガーリチ・ヴォルィニ地方の政治の混乱が描かれている。この編集単位は、ダニールの結婚の記事[732]で終わっているが、区切りとしては暫定的なものである。ただこの記事には、後の出来事であるダニールの息子たちの名前が列挙されている。この部分は「ガーリチ年代記」が成立した際の後年の挿入であるにしても、編集者はダニールが成人したことを示すこの記事に一定の区切りを見ていた可能性がある。

### ③ ムスチスラフによるガーリチ支配の時代の物語 ([732]-[740] 1217年～1223年)

この編集単位は「ムスチスラフはレシエクの助言によってガーリチへと進軍した」[732]の文言で始まり、ダニールの同盟者であるムスチスラフ公によるガーリチ支配の時代の物語([731]-[739] 1217年～1223年)が語られている。しかし、記述の中心は、ダニール(とヴァシリコ)であり、その遠征活動が主に描写されている。

この単位の末尾には、ヴラジミル主教区創設、ダニールによる城市ホルム建設、イオアンのホルム主教叙任など、様々な年代の出来事が、都市建設と主教座創設とのかかわりでまとめて

---

9) この物語は「ガーリチ年代記」の最後に近い個所にある「〔ロマン公〕は、かつて研いだ剣で異教徒を獅子のごとく襲撃し、ポロヴェツ人はこれを持ち出して子供たちを脅かしたのだった」[813]の文言とも照応している。

おかれている ([739]-[740])。これは編集単位がここで区切れていることの明らかな指標となっている。なお、②と③の編集単位はほとんど同一の編集者の手になるだろう。

#### ④ カルカ川の戦いの物語 ([740]-[745] 1223 年)

この物語は、ガーリチ・ヴォルィニ地方の政治情勢と直接の関係はない。唯一、ダニール公がこの戦いに参戦したというだけの関わりで挿入された（おそらく「ガーリチ年代記」成立の時点）と考えてよいだろう。物語の末尾に、チングスハンの死についての記述もあり、これまでとはかなり異なった起源の情報が用いられている。

この部分の編集者（記者）については、情報内容が大きく異なることから、上の②、③の編集者とは別の人物である可能性が高い。

#### ⑤ ダニールによるガーリチ支配達成の物語 [745]-[778] (1224 年頃～1238 年)

この長い物語は、時系列によれば③の最後から繋がっている。内容的には、ここからダニールとヴァシリコは、ガーリチ公であるムスチスラフと敵対することになる。ガーリチ支配をめぐる、ハンガリー、ポーランド、ガーリチ・ヴォルィニ地方の諸公の勢力が複雑に絡み合うが、1228年にムスチスラフが没する [752] と、一時的なハンガリーの支配の後に、ダニールがガーリチの公座を獲得する [771]。しかし、まもなくチェルニゴフ系の諸公との紛争が始まる。そして、1238年のダニールによる第5次のガーリチ公座即位 [777] によって、かれのガーリチ地方の支配が最終的に確立され、これによりこの編集単位は閉じられる。

この部分には「ダニールとヴァシリコのカリシュ遠征の物語」([754]-[758] 1229 年) および「ダニールとヴァシリコの対ハンガリー、シュームスク近郊の戦いの物語」([767]-[770] 1233 年) の長い物語があり、ダニールの軍司令官としての優秀さが描き出されている。

この部分の編集者による直接の発言に注目すると、[750]の末尾に「われらは話そう。無数の戦争を、大いなる難事を、頻繁なる軍事行動を、多くの反逆を、頻繁なる反乱を、多くの騒乱を。なぜなら、若い時から、[ダニール]には平安がなかったのだから」との言葉があり、[762]にも明らかに同じ編集者による「これより後、われらは多くの騒乱、大いなる策略、無数の戦争について語ろう」との類似の文言がある。このことから、ダニールによるガーリチの公座獲得に至る紆余曲折の過程を描き出すことが、この編集単位の編集者（記者）の主な目的であったことがわかる。

#### ⑥ モンゴル・タタール人によるルーシ、キエフ、ハンガリーの攻略の物語 [778]-[787] (1237 年～1240 年)

この部分は、④と同じく、ガーリチ・ヴォルィニ地方の政治情勢とは直接かわらず、内容

的にも、北東ルーシおよびキエフ、さらにはモンゴル勢から見た事件の描写が主になっている。おそらく、前後の⑤および⑦とは異なった編集者（記者）が主要な部分を書いたのだろう。

ただし、モンゴル人遠征軍の記述に割って入るように「ダニールとチェルニゴフ勢ミハイルの抗争の物語」（[782]-[784] 1237年～1240年）が置かれている。この物語は、ダニールに近い場所にいる記者の手になることは明らかである。

⑦ ダニールのガーリチ統治と隣国への遠征の物語（ダニールのガーリチ時代）（[787]-[805] 1240年～1245年）

「それより前に、ダニール公はハンガリー王のところへ駆けつけていた」[787]の文言で始まる部分で、ダニール公の政治活動の描写が中心となっている。これまでと同じく外国への遠征が語られると同時に、ガーリチ支配をめぐるガーリチ貴族との間の抗争が描かれる。この時代から、ダニールは少しずつ活動拠点をホルムに移すようになり、ホルム滞在の記述が目立つが<sup>10)</sup>、まだガーリチから完全に離れることはない。

この部分の末尾には、チェルニゴフ勢（ロスチスラフ）との抗争の決着となる「ヤロスラフ郊外の戦い」の長い物語（[800]-[805] 1245年8月）が語られている。内容的に見れば、物語の区切りとして相応しい。

編集者（記者）については、⑤および、⑥の「ミハイルとの抗争の物語」の編集者と同じ人物と考えられるだろう。

⑧ ダニールのバトゥ宮廷への参内の物語（[805]-[809] 1245年～1246年）

ダニール自身の旅行を記述するもので、これまでの記事・物語とは舞台も題材も異なっているが、ダニールについての物語という点は共通している。ダニールの近くにいた人物が記録して、物語として編集したものだろう。

この物語の編集者自身による詠嘆の言葉に「先にわれらが話した通り」[808]と、[795]で語られたミハイル公[G41]殺害が参照されている。このことから、⑧と⑦の物語の編集者は共通と見てよいのではないか。

⑨ ダニールのハンガリーおよびポーランドとの外交の物語（ダニールのホルム時代）[809]-[848]（1246年～1258年）

「ガーリチ年代記」の最後の部分にあたる長い物語である。この部分では、ダニールの活動

---

10) [777] (1238年), [789] (1241年), [794] (1242年), [805] (1245年)]。なお、城市ホルムが建設されたのは1236～38年のことである。

の拠点は完全に城市ホルムに移されており、例えば、[808]-[829]の範囲には城市ガーリチについての言及はまったくない。この編集単位は長い期間をカバーしており、内容的には、ハンガリー、ポーランド、リトアニア、ヤトヴァグ人、オーストリア、教皇庁などと活発な外交が展開され、その状況が描写されている。内政が安定したからであろうか、外交や対外遠征の物語がほとんどを占めている。

この部分の大きな物語としては「リトアニア大公ミンダウガスおよびリトアニア諸公の物語」([815]-[820] 1249～1253年)、「ダニールのオパヴァ遠征物語」([821]-[826] 1252～53年)、「ダニールの王位戴冠をめぐる物語」([826]-[827] 1253年)、「ダニール一族と同盟諸公によるヤトヴァグ人討伐遠征の物語」([831]-[836] 1255～56年)、「ダニールによるホルム創建の物語」([842]-[846] 1237年～1238年)、「ブラルダイの第一次到来とダニールのリトアニア攻撃の物語」([846]-[848] 1257年)などが語られている。

さらにここでは、年代記的な物語記事の流れとは関係のないエピソード的な記述が目立っている。[813]にはダニール、ヴァシリコとその父ロマンへの讃詞が挿入されており、冒頭[716]の表現が繰り返し用いられている(上記①の項参照)。また、[820]には年代記記者の記録についての編集者の方針が表明されている。上記の「ダニールによるホルム創建の物語」も年代的には遡っており、年代記的な時系列の外にある。

このことは、この部分で「ガーリチ年代記」の編集者は、年代記編集のひとつの総括を意識していたのではないかとも考えられる。

## (2) 「ヴォルィニ年代記」

### ① ブラルダイの再来の物語 ([848]-[855] 1259年～1260年)

記事・物語の内容としては、ブラルダイの遠征とそれへの諸公の従軍が描かれており、一見すると「ガーリチ年代記」の⑨の部分の継続にも見えるが、先に示したように[848]の部分で編集の大きな切れ目がある。ヴァシリコ公の軍事的な才能を称賛する内容や遠征についての詳細な叙述から見て、この部分はヴァシリコ公に従軍した記者の資料をもとに編集されたものだろう。

### ② ヴァシリコの対リトアニア政策の物語 ([855]-[858] 1262年)

イパーチイ写本の年紀6770(1262)から始まるこの部分では、リトアニア人のマゾフシェ攻撃とカメネツ襲撃、ヴァシリコのネブリの戦いの勝利、ポーランドとの和議について語られている。

物語の内容は異なっているものの、やはりヴァシリコ公の活動を描いており、先行する①と同じ編集者(記者)の手によるものだろう。



③ ミンダウガス殺害とヴァイシュヴィルカスの物語 ([858]-[863] 1263 年～1264 年)

「この会合の後、1 年が過ぎた」の語句で始まるこの部分は、先の①、②とは異なり、ヴァシリコは登場せず、リトアニアの政変の様子が詳しく描かれている。その間に、きわめて簡単にダニール公の死の記事が挟まれている ([862] 1264 年)。このことから、①、②とは別の記者の手になる記事を用いていることは明らかである。ダニール公の死の記事が素っ気ないのは、記者の手に十分な情報がなかったことによるだろう。

④ シヴァルンとヴァシリコの対ポーランド外交の物語。ヴァイシュヴィルカス、シヴァルン、ヴァシリコの死 ([864]-[869] 1265 年～1269 年)

この部分はイパーチイ写本の年紀 6773(1265)の部分からだが、「天のしるし」(彗星)についての記事 [863] で始まっている。「天のしるし」は、他の年代記では不吉な事件と関連付けて言及されるのが普通だが、ここでは「地上に大いなる騒乱 (мятеж великий) が起こるだろうが、神は自らの御心によって救われるだろう」という「物知りたち」(хитрѣчи) 発言が紹介され、「そして何も起こらなかった」と災厄の前兆ではなかったと説明されている。これは、通常の年代記の「天のしるし」記事をあたかもパロディ化しているような解釈であり、本年代記の世俗的な性格を象徴しているのではないか<sup>11)</sup>。

ここでは再び、ヴァシリコの活動に焦点が移され、同時に甥のシヴァルンと息子のウラジーミルの従軍も描かれ、さらにもう一人の甥レフがヴァイシュヴィルカス公の殺人者として登場する。さらに、シヴァルンの死 ([869] 1269 年) とヴァシリコの死 ([869] 1269 年) が連続して記述されている。全体としては、リトアニアの支配者たちの紛争とリトアニアの混乱が中心的なテーマとなっている。

ここでは、①～③の主人公だったヴァシリコ公の死の記事が非常に短く、かれを称揚する表現すらないのはなぜだろうか。おそらく、次の⑤の部分への移行における編集者(記者)の交代が大きな理由ではないか。この部分の記事が、総じて切れ切れの印象を与えるのも、ここでは年代記の記録とその継承が順調ではなかったことの証左ではないだろうか。交代にあたって、洗練された文章でヴァシリコ公を称揚する文才のある記者がいなかったということも考えられるだろう。

---

11) このような「しるし」を楽天的に解釈する傾向は、1245年のヤロスラフ郊外の戦いのときに顕れた鷲と鴉の飛翔 [802] の解釈にも見ることができる。

⑤ ウラジーミルのヴラジミル支配およびレフのホルムとガーリチ支配の時代の物語 ([870]-[897] 1269年～1288年)

「かれ〔ヴァシリコ〕に代わってかれの息子ウラジーミルが公支配を始めた」([870] 1269年)でこの部分の物語は始まり、ウラジーミルを称揚する言葉に続いて、「他方、レフはガーリチとホルムで、自分の兄弟のシヴァルンを継いで公支配を始めた」([870] 1269年)との記述がある。ここでは、ガーリチ・ヴォルィニ地方の統治者が世代交代で一気に改まっており、それに伴って年代記編集者(記者)も交代したと考えられるだろう。

この部分の物語は、これまでと同じく、ポーランド、リトアニア、ヤトヴァグ人との外交、遠征についてのものが多いが、基本的にはウラジーミルに寄り添って語られており、レフの活動については批判的である。

この部分で語られている長い物語としては、「ウラジーミルによるカメネツ建設物語」([875]-[876] 1276年)、「ノガイによるリトアニア遠征への従軍の物語」([876]-[878] 1277年)、「ウラジーミルの対ヤトヴァグ人および対ポーランド政策の物語」([878]-[880] 1278年～1279年)、「レフの対ポーランド政策とウラジーミルのコンラート援軍の物語」([881]-[887] 1280年～1287年)、「ノガイとトゥラ・ブカによるハンガリーとポーランドへの遠征軍への援軍物語」([888]-[897] 1287年～1288年)がある。これらの物語が、ウラジーミル公に近い編集者(記者)の手になることは言うまでもない。記述の仕方もこれまでの物語と同じく、情報本位になっている。

⑥ ウラジーミルの死の物語と公への長い讃詞 ([897]-[927] 1288年)

この部分は「神はわれらを〔罰するための〕自らの剣を送った。それは、われらの罪が増したことに對する、自らの怒りに仕えているのである」[897]の文言で始まっている。内容は、トゥラ・ブカとアルグイのポーランド遠征への諸公の従軍の物語だが、すぐにウラジーミルの病気にテーマが移り、その後はウラジーミルの後継者と所領をめぐる紛争について語られている([897]-[914])。

ここで注目すべきは、[903]-[904]の部分に、ウラジーミル公が後継者であるムスチスラフと自分の妃に宛てた二通の遺言状(約定書)が引用されていることである。ここでは、年代記が公文書の記録・保存の役割を果たしており、編集者の年代記に対する新しい姿勢を伺うことができる。このような公文書を年代記に書き込む手法は次の⑦の編集者も採用しており(以下参照)、そのことからこの引用については、後年のムスチスラフ公配下の編集者がこの個所に挿入したものと考えられる。

次に[914]から「われらはかれの病気について次のように語ろう」と改めて編集者の断り書きがあり、かれの臨終の物語と、イラリオン of 著作を借用したウラジーミル公への讃詞([915]-

[925]) が続き、その後、ウラジーミル公の教会建設と教会への奉納品について詳細に描写されている ([925]-[927])。

この部分の編集者の基本的な立場は、冒頭の文言にあらわれているように、非常に色濃いキリスト教的なイデオロギーである。そのことは、臨終のウラジーミル公についての篤信のキリスト教徒としての描写に伺われ、これに続くウラジーミルへの讃詞と教会への貢献の描写に最も典型的にあらわれている。編集者は疑いなく敬虔な教会人であり、同時に、豊かな文才を持った著述家であろう。

#### ⑦ ムスチスラフの時代の物語 [928]-[937] (1289 年)

この部分は「ヴラジミルにおける大いなる公ムスチスラフの支配の始まり」[928]の文言で始まっており、区切りは明瞭である。ここでは、⑥から一転して、ヴラジミルの公座を継承したムスチスラフについての、世俗的な内容の記事が綴られている。まず、「ユーリイのベレスチエ奪取の策略をムスチスラフが撃退し、ベレスチエ人を懲罰する物語」([928]-[932])、次いで「ムスチスラフ公のヴラジミル公座就位とかれへの讃詞」([933])、さらに「リトアニア、ポーランド、チェコとの情勢とムスチスラフおよびレフの外交の物語」[933]-[937])、「ムスチスラフの建設事業と配下のヴォルィニ地方の諸公について」([937])と続いている。

全体としては、世俗的で情報本位の年代記記述であり、これまでの本年代記の標準的な事件叙述の方法を引き継いでいることが分かる。また、1289年の記事にはムスチスラフ公がベレスチエ人に宛てた「狩猟税」に関する文書が引用されており[932]、そこには「わたしは年代記に書き込んだ」という文言があることから(上記⑥参照)、本年代記を行政のための実務的な文書と見る立場を伺うことができる。このことは、上の⑥の編集者の立場とは大きく異なっており、ここで編集者の交代があり、ムスチスラフ公配下の人物が編集を担当していることは明らかである。

この部分で注目すべきは、ムスチスラフの兄弟レフの軍司令官としての活動と手腕が、非常に高く評価されていることである。この傾向は、レフに対する評価が否定的だった⑤の物語群と比べて著しく異なり、新しい編集者の立場からなされた評価であろう。おそらく、ムスチスラフ公は、ベレスチエ回復に協力的だったユーリイ公と和解して、両者の間には同盟関係が成立していたのだろう。新しい編集者はその情勢の変化に対応した人物と考えられる。

#### 4. 『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』編集史の総括。その「未完の年代記」としての基本的性格

さて、以上に編集単位と構成を検討してきたが、その総括として、本年代記の編集過程を全体として概観してみたい。

本年代記は、100年、三世代の長期にわたる資料を、特定の編集者がすべて収集し、一気に時系列に配置することによって編集されたものでないことは明らかである。これまでの検討で見てきたように、様々な資料が時系列に沿って段階的に編集され、それが積み上げられることによって成立している年代記である。そして、その積み上げは、機械的な積み重ねではなく、先行の編集方針を考慮した上で、それを踏まえた後年の編集（時には先行記事の改変や挿入）が施されている。その結果、本年代記は全体として一貫性を保持したものになっている。

その一貫性は、編集スタイルの上では、教会スラブ語的な形態や語彙、独立与格を多用した即物的な文体<sup>12)</sup>が全編にわたって用いられていることなどにあらわれている。さらには、後述するように、年紀が一貫して欠如している問題も含まれるだろう。

他方、思想的な一貫性としては、① ロマン [I11] 一族諸公（とくにダニール、ヴァシリコ、ウラジーミル、ムスチスラフ）の公としての活動を記述し、ガーリチ・ヴォルィニ地方におけるかれらの支配の確かさを主張する、② 諸公と外国勢力（ハンガリー、ポーランド、リトアニア、モンゴル）との関係に注目して、外国勢力に間における諸公の地位の確かさを描き出し、諸公の軍事力、勢力、影響力の強さを主張する、の二点を指摘することができる。

①は、本年代記を貫く主要なイデオロギーと言ってよいだろう。冒頭でまずロマン・ムスチスラヴィチ公 [I11] が「全ルーシの専制君主」(самодержец вся Руси)[715]として称賛されており、その後ロマン公が範とするモノマフ公の事績を描く序言が続く（[715]-[717]）。また、1230年の記事 [757] までは、ダニールとヴァシリコの二人は「ロマンの二人の息子」(дети Романови, Романовичи)、二人の母親は「ロマンの公妃」(княгини Романовая)と呼ばれており、とくに「ガーリチ年代記」にはロマン公についての言及が非常に多い。そのイデオロギーは、後の編集者にも引き継がれ、ダニールが1238年に最終的に獲得したガーリチの公座は「自分の父の公座」[778]と呼ばれ、「ダニールの父（ロマン公）はルーシの地の皇帝(царь)だった」[808]、「(ダニールとヴァシリコは)自分たちの父、大いなるロマンの道を継いだのである」[813]という記述もある。また「ヴォルィニ年代記」においても、ウラジーミルは「ロマンの孫」(внукъ Романов)[862][903][918]であり、ヴァシリコは「ロマンの息子」(сынъ Романов)[869]、ムスチスラフもまた「ロマンの孫」[932]と呼ばれており、諸公をロマン公の一族として描くという姿勢は一貫して続いている。

一族諸公の支配の確かさについては、主要な公を有能な都市建設者として描き出そうとするモチーフが一貫していることを指摘しておきたい。ガーリチとヴラジミル＝ヴォルィンスキイは、かれらの登場以前にすでに都市は成立していたのだが、ガーリチについては、[722]の個所に「あとで、ガーリチの丘とそこが起源となった〔都市〕ガーリチの始まりについてわれら

---

12) [Юрьева 2015: С. 67-71, 73-75]

は語ることにしよう」という編集者による不思議な文言がある。以下の記述にそれに該当するような「ガーリチ建設物語」は語られていないので、この目論見はアイデアにとどまり、書かれることはなかったのだろうが、編集者に都市建設を描き出すモチーフがあったことが確かめられる。

ダニールについては、先に指摘したように、城市ホルムの建設についての長い描写があり ([842]-[846] 1237年～1238年)、ウラジーミルについては、城市カメネツ建設についての物語 ([875]-[876] 1276年)が書かれている。さらに、ムスチスラフについても、断片的ではあるがチェルトリスクでの建設についての言及がある ([938] 1289年)。これらは、本年代記の編集者たちの間に継承されていった、支配公のあるべき業績とそのイメージに関わっているのではないだろうか。

②については、外国からの侵略、外国への遠征の記述が一貫して大きな部分を占めていることから一目瞭然である。それゆえに、コトリヤールが指摘するように<sup>13)</sup>、年代記というよりも、世俗的な「軍事物語集」という印象を与えている。モンゴル勢を描くときにはキリスト教徒としての立場が強調されているが、全体としては、『原初年代記』『キエフ年代記』と比べると、描かれた事件に対する教会的な評価があまり表に出ていないことが特徴的である。

さて、本年代記の編集過程を考える上で考慮に入れるべき重要な性格は、これが「未完の年代記」であるという点である。本年代記の末尾の記事を見ても分かるように、編集を総括するような文言はまったくなく（同じ集成年代記でも『原初年代記』『キエフ年代記』にはそれがある）、不意に記事が切れた印象がある。そして、年代記にとって致命的とも言える年紀の欠如も、最終的にこれに年代を加える前に、年代記そのものの編集が途切れてしまったことに原因があるのではないだろうか。

年紀がなぜ欠けているのかという問題は、これまでも研究者の関心をよんでおり、当初から編年には関心を払わない特別な年代記だったという見解もあるが<sup>14)</sup>、本稿の筆者は、編集者には年紀を付す意図はあったが、それが実現される前に年代記作成作業そのものが何らかの事情で途切れたという立場を取りたい<sup>15)</sup>。

そのことは、[820]に挿入された年代記記者の編集方針の言葉からも推察することができる。そこでは「われらは、すべての年代を書き入れることにしよう、あとから〔時を〕計算をすることによって」(Вся же лѣта спишемъ, роцетъше во задънѣя)、と明確に意図を表明しており、おそらく年代記の前半部分は年代のない編集だったとしても、この([820])部分以降は、何

13) [Котляр 2005: С. 60]

14) [Котляр 2005: С. 34]

15) フルシェフスキイなどはこの立場である [Грушевський-Хронологія: С. 327-328]。

らかのかたちで年紀の入った写本もしくは年紀だけの資料が存在していたのではないだろうか。年紀が記事の中に存在しないにもかかわらず、本年代記のすべてにわたって記事・物語の配置は時間的な順序がほぼ正確に保たれているという事実もまた、「あとで書き入れる」ために作成された補助的な年紀資料の存在をうかがわせる。

さらに、本年代記の全体を見渡してみると<sup>16)</sup>、驚くべきことに、記事の中に年代が記されているのは1289年のウラジーミル・ヴァシリコヴィチ公の死<sup>17)</sup> [918]と同年のムスチスラフ・ダニーロヴィチのヴラジミル公座即位<sup>18)</sup> [932]の記事の二か所しかない。ところが例えば、ダニール公の死 [862]、ヴァシリコ公妃エレーナの死 [863]、ヴァシリコ公の死 [869]、ボレスワフ五世の死 [880]のような重要な人物の死亡記事で、他の年代記なら年紀が伴うべき記事にも年代が付されていない。また、チェルトリスクへの攻撃 [752] (聖大土曜日、復活祭) やヴァイシュヴィルカスの殺害 [868] (受難週間) の記事のように、正教の祭日が示されているながら、年紀が欠けているという不自然な例もある。このように見ていくと、「草稿」の段階では、後の年代書き込みを想定して、ことさらに年代がない (もしくは省かれた) 本文の写本と、年代のみが記された写本が準備されていたが、最終的に前者の「草稿」だけが残って伝わったという可能性が否定できないだろう。

## 5. イパーチイ写本に反映されている年代挿入の編集について

以上検討した年代の「欠如」は、本年代記を読む者は誰もが気が付くことである。そして、年代記が筆写されていく過程において、イパーチイ写本の原本にあたる写本の筆写において、この「欠如」を正して年代を補おうとした写字生が現れ、その作業の成果がイパーチイ写本に反映することになった<sup>19)</sup>。これは本年代記の編集史の上でも重要な出来事であることから、どのようにして年代挿入がなされたかを検討する必要があるだろう。この問題は、近年になって、

---

16) フレーブニコフ写本の読みだけに注目し、後代の書き込み (欄外古註) を考慮しない場合。

17) 「金曜日が明けて、このようにして篤信のキリストを愛する大いなる公ウラジーミル [I1121]、ヴァシリコ [I112] の息子でロマン [I11] の孫である御方が逝去した。父親の跡を継いで20年間公支配をした (…)<sup>6797</sup> [1289] 年12月10日の、師父聖メナスの日のことだった」(Свѣтающо же пятку, и тако преставися благовѣрный христоролюбивый великий князь Володимѣръ, сынъ Василковъ, внукъ Романовъ, княживъ по отци 20 лѣтъ <…> в лѣто 6797, месяца декабря во 10 день, на святаго отца Мины)。

18) ムスチスラフ公 [S4] は、自分の兄弟ウラジーミル [I1121] の公座に座した。それは、まさに〔復活〕大祭の日、6797 [1289] 年4月10日のことだった。(Князь же Мьстиславъ сѣде на столѣ брата своего Володимеря, на самыи великъдень, в лѣто 6797 месца април 10 день)。ただし、イパーチイ写本では下線の年代が削除されている。おそらく全体的に年代を挿入した際に、年代のダブリが生じたことから削られたものだろう。

19) [イパーチイ年代記 (10) : 227 頁]

ロマノヴァ [Романова 1997] と A・トロチコ [Толочко 2005] の研究が発表されるに及んで、その具体的な作業の過程がほぼ明らかになった。以下では、それらの研究に拠って、どのようにして年代挿入がなされたのかについて概観してみたい。

本年代記の翻訳と注釈の作業の中で、テキストに描かれた事件の実際の年代について、フルシェフスキの研究 [Грушевський-Хронологія] などを参考にしながら考証を行い、訳文の小見出しに記した。これを、イパーチイ年代記に記された年紀と比べると、少数だが一致するものがあり、ほとんどは1～3年の誤差であり、4年以上年代が隔たっていることはほとんどなかった。このことは、年代挿入の作業が、年代記成立の時点から1世紀以上も後であることを考えると、驚くべき「正確さ」と言ってもよいのではないか。

そのような「正確さ」が実現できたのは、この年代挿入者（以下〈編者〉）は、一貫した方法にしたがって年代挿入の作業を行い、その方法が妥当なものだったことによっている。ではどのような方法が取られたのだろうか。これについて、上記の研究が、写本の古文書学的対照やテキストの文体分析などによって明らかにしているの、それに拠って、〈編者〉の作業のプロセスを再構成してみたい。

まず、〈編者〉の手元にあったのは、『原初年代記』『キエフ年代記』『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』の三つの部分を含む、『イパーチイ年代記』と同じ構成の写本だった（テキストはフレープニコフ写本に反映）。かれはこれを見て、後半の部分に年紀がなく、最後の年紀は「6706年」（в лѣто 6706）（文字による数表記で、1198年に相当、[707]の個所に相当）で終わっていることに気が付いた<sup>20</sup>。そして、この写本は年代記としては不完全であると考え、この空白部分に年紀を加えて、自らの手で年代記を完成させようと志した。これが〈編者〉の作業の動機であると思われる。

〈編者〉が最初に行ったのは、「6706年」以降のテキストの中に、事件の年代を特定できる個所を探し出すことだった。しかし、これまで見てきたように、テキストそのものには、年代についての手がかりは、上記の、6797(1289)年のウラジーミル公の死とムスチスラフ公の公座即位以外には見いだすことができない。そこで〈編者〉は、テキストの中に、年紀を持つ他の年代記に描かれている事件と同じ事件が記述されていないかと考えた。もし同じ事件が記述されていれば、他の年代記に記されている年代が、テキストの事件の年代とすることができるからである。探してみると、テキストに、他の年代記にも記されている全ルーシ的な事件についての記述があることが分かった。このことは、ガーリチ・ヴォルィニ地方という地域的な事件

---

20) この個所は現代の年代記学では、『キエフ年代記』の最後の部分にあたり、これ以降にリユーリク [J2] によるミハル修道院の壁建設の記事と同修道院長モイセイによるリユーリク讃詞の長い記事が続いているが、〈編者〉はこの部分にも6707(1199)、6708(1200)の年代を挿入している。

を扱っている本年代記にとっては、例外的な記述なのだが、〈編者〉の作業にとっては非常に幸運だったと言える。

そのような事件とは、カルカ川の戦い(6732(1224))、バトゥの北東ルーシ(6745(1237))およびキエフ(6748(1240))への侵攻、リトアニア大公ミンダウガスの死(6771(1263))およびヴァイシユヴィルカスの死(6776(1268))であり、カッコ内がその年代である。〈編者〉は、これらの事件の年代を、15世紀の初めにモスクワで編集された『ソフィア第一年代記』(Софийская первая летопись)の原初的な版を参照することによって得たと考えられる。テキストの記述を、『ソフィア第一年代記』の記述と対照してみると、〈編者〉が年代の表記について、このモスクワ年代記から類似の表現を借用していることが分かる。

こうして、年代空白部分について、6706(1198)～6732(1224)～6748(1240)～6771(1263)～6776(1268)～6797(1289)という、大きな年代の枠組みを設定することができた。次に〈編者〉が取り組んだのは、それぞれの枠組みの間を、1年ごとの年代を挿入していく作業である。その挿入個所のメドとして先ず注目したのは、テキストにある、「その年」(в то же лѣто), 「その後」(потом же), 「時が過ぎて」(времени минувшу)のような時間の移行を示す表現だった。幸いそのような表現はテキストには多く見出すことができたために、〈編者〉はそのような個所に事件の時間の境目があると判断して、年代を順番に挿入していった。その際、もとのテキストにあった時間表現を削除して、それを年代表記に置き換えることを作業の原則とした(そのことはフレーブニコフ写本との比較によって分かる)。

当然ながら、そのような時間表現と挿入すべき年代の数が一致するとは限らない。前者が少ない場合もあれば多い場合もある。時間表現が少なく、多くの年代を挿入しなければならない場合もある。例えば、6721(1213)～6732(1224)の期間には、11個所に年代を挿入しなければならないが、記事の分量が多いにもかかわらず、時間表現は多くない(7個所ほど)。ときには〈編者〉は、時間表現の個所に2年分の年代を挿入し、最初の年代のあとには「静かだった」(бысть тишна), 「なにも起こらなかった」(не бысть ничто же)などの文言を書き加えている<sup>21)</sup>。これは例えば、『原初年代記』の6534(1026)と6554(1046)にある「大いに静かだった」(бысть тишина велика)の表現を真似たものだろうが、これによって、年代の数が足りなくなることを防ぎ、同時に年代記としての不自然さを解消している。上記の期間には空の年代と記事が2年間隔で挿入されていることがわかるが、これは「平穏」な年が連続する不自然さを避けるための〈編者〉の工夫だろう。

他方、時間表現が多く、挿入すべき年代がそれに比べて少ない場合には、記事の内容を考慮

---

21) そのような「空の年代と記事」は6722(1214), 6724(1216), 6726(1218), 6728(1220), 6730(1222), 6750(1242), 6752(1244), 6775(1267), 6777(1269)の個所に挿入されている。



し、年代の間の記事の分量が均等になるように配慮しながら、適当な時間表現の部分に年代を挿入している。

このような、作業を全体にわたって行ったことによって、イパーチイ写本に見るような、1年の欠如もなく全面的に年代が施されたテキストが完成した。そこにおいて、実年代との間にさほど大きな差が生じなかったのは、〈編者〉が採用した方法がアイデアに富んだ、効果的なものだったからに他ならない。

この作業がいつ行われたかについて、先の解説では「おそらく14世紀の中頃」<sup>22)</sup>としたが、本稿では訂正せざるを得ない。〈編者〉が『ソフィア第一年代記』を参照していると思われることから、作業はその成立の後ということになる。当該の年代記は、その原初版が6926(1418)年の記事までカバーしていることから、1420年前後の成立が想定される<sup>23)</sup>。他方、イパーチイ写本の成立は古文学書・写本学的な研究から、1420年代末と推定されている<sup>24)</sup>。そうすると、イパーチイ写本が作成された時期から遠くない前、もしくは、イパーチイ写本そのものの筆写・作成の際に、この年代挿入の作業がなされているとも考えられる。上記の研究者は確定的な言い方はしていないにせよ、イパーチイ写本の年代表記の文字使いや朱文字の分析から、年代挿入を行った〈編者〉とイパーチイ写本の写字生は同一人物ではないかという意見に傾いている。

## 参考文献

- Генсьорський 1958 — Генсьорський О. І. Галицько-Волинський літопис (процес складання, редакції і редактори). Київ, 1958.
- Генсьорський 1961 — Генсьорський О. І. Галицько-Волинський літопис (лексичні, фразеологічні та стилістичні особливості). Київ, 1961.
- Грушевський-Хронологія — Грушевський М. С. Хронологія подій Галицько-Волинської літописі // Грушевський, Михайло Сергійович. Твори: у 50 т. Львів, 2005. Т. 7., С. 327 - 387.
- Котляр 2005 — Котляр Н. Ф. Композиция, источники, жанровые и идейные характеристики Галицко-Волынской летописи // Галицко-Волынская летопись: Текст. Комментарий. Исследование / сост. Н.Ф. Котляр, В. Ю. Франчук, А. Г. Плахонин. под ред. Н. Ф. Котляра. СПб., 2005. С. 30 - 60.
- Орлов 1926 — Орлов А. С. К вопросу об Ипатьевской летописи / Известия Отделения русского языка и словесности. 1926, Т. 31. С. 93—126.
- Пашуто 1950 — Пашуто В.Т. Очерки по истории Галицко-Волынской Руси. М., 1950.
- Романова 1997 — Романова О. В. О хронологии Галицко-Волынской летописи XIII в. по Ипатьевскому списку // Прошлое Новгорода и Новгородской земли. Материалы конференции.

22) [イパーチイ年代記(10): 227頁]

23) [СККДР II/2: С. 57 - 60]

24) [イパーチイ年代記(10): 226頁]

- Новгород, 1997. С. 66 - 68.
- СККДР II/2 — Словарь книжников и книжности Древней Руси. Вып. 2 (вторая половина XIV - XVI в.) Ч. 2. Л - Я. Л., 1989.
- Толочко 2005 — Толочко А. П. Происхождение хронологии Ипатьевского списка Галицко-Волынской летописи // *Paleoslavica* XIII/1 (2005). pp. 81 — 108.
- Ужанков 2009 — Ужанков А. Н. «Летописец Даниила Галицкого» // Проблемы историографии и текстологии древнерусских памятников XI - XIII веков. М., 2009. С. 287-422
- Черепнин 1940 — Черепнин Л. В. Летописец Даниила Галицкого // Исторические записки. М., 1941. № 12.
- Юрьева 2016 — Юрьева И. С. Лингвистические параметры стилистических различий между Галицкой и Волынской летописями // Письменность Галицко-Волынского княжества: историко-филологические исследования. Jitka Komendová a kol. Olomouc, 2016.

- イパーチイ年代記(10) — 中沢敦夫, 今村栄一 『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈(10) — 『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』 (1201 ~ 1229年) 『富山大学人文学部紀要』 (70号, 2019年2月) 225-325頁。
- イパーチイ年代記(11) — 中沢敦夫, 宮野裕, 今村栄一 『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈(11) — 『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』 (1230 ~ 1250年) 『富山大学人文学部紀要』 (71号, 2019年8月)。177-270頁
- イパーチイ年代記(12) — 中沢敦夫, 宮野裕, 今村栄一 『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈(12) — 『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』 (1251 ~ 1264年) 『富山大学人文学部紀要』 (72号, 2020年2月)。115-200頁
- イパーチイ年代記(13) — 中沢敦夫, 宮野裕, 今村栄一 『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈(13) — 『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』 (1265 ~ 1287年) 『富山大学人文学部紀要』 (73号, 2020年8月)。220-290頁
- イパーチイ年代記(14) — 中沢敦夫, 宮野裕, 今村栄一 『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈(14) — 『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』 (1287 ~ 1292年) 『富山大学人文学部紀要』 (74号, 2021年2月)。173-217頁。
- 中沢 2018 — 「解説『キエフ年代記』の編集史について」(中沢敦夫『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈(9) — 『キエフ年代記集成』 (1196 ~ 1199年) 所収), 『富山大学人文学部紀要』 (69号, 2018年8月) 241-265頁

#### 〔後記〕

本稿は、2021年度 JSPS 科研費、基盤研究(C)「キエフ・ルーシ時代の諸年代記の比較対照法による編集過程の研究」(19K00469, 研究代表者: 中沢敦夫) の助成を受けて行われた研究に基づいている。

